

[要旨]

構造化理論から知識の社会学へ(2)

倉田 良樹

構造化理論では、行為主体性という概念は「世界内の事象の継続する過程に対して、身体を持った存在が、能動的にあるいは熟慮のうえで、因果的に介入していく流れ」として定義されている。ギデنزが行為主体性という概念を社会における行為および・ないし行為者の存在論的なステータスに言及する抽象概念として用いている。行為主体性による世界内の事象への因果的な介入を可能にするのが、行為者の知識能力であるが、この知識能力は不完全なものであるため、行為者には行為の認知されざる条件と意図せざる帰結が悪循環するサイクルを統御し尽くすことができない。ストーンズはギデنزが提出した「知識能力とその限界」という命題に関連して汎用的性向と接続特定力という二つの概念を導入してさらに深い考察を行った。ストーンズが試みたのは、この二つの概念を中心にして、社会の事象を具体的に説明できる社会理論のツールとしての「強い構造化理論」を構築することだった。

本論文の後半において筆者はストーンズの強い構造化理論を基盤に「知識の社会学」というフレームワークを構築するための理論的な考察を行っている。日常生活において、行為者が自然的態度として受容している汎用的性向を自省的な省察によって修正することは困難である。不慮の出来事を契機として行為者が汎用的性向を変容させ、外部構造との関係を修正していくプロセスを説明することは知識の社会学にとって重要な課題である。他方、行為者は接続特定力を用いて構造を能動的に統御できる存在であるが、強度な接続特定力を保持した過剰に能動的な行為者がしばしば既存の外部構造のなかに深く埋め込まれた受動的な立場を甘受している、という点も知識の社会学にとっての重要な知見である。